

---

# 私の正体\*。 マーメイド\*。

peach-pit

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の正体\*。マーメイド。\*

### 【Nコード】

N3319D

### 【作者名】

peach-pit

### 【あらすじ】

マーメイドの三ヶ<sup>みかの</sup>野原<sup>はらうみり</sup>海李。16歳になり、人間として陸で生活始める。朝、海で崎本<sup>さきもと</sup>裕樹<sup>ゆうき</sup>に出会う。海李は裕樹に一目惚れ。だけど海李はマーメイドなのはどうする?!

## 彼との出会い

私は海の底に住んでいるマーメイド

ピンク色で珍しいマーメイド。

16歳になった私はこれから陸で人間の姿で生活することが出来る。

「それじゃあお母様！行つてきまあす」

「いつてらっしゃい。あ、そうだ！」

お母様は私に綺麗なネックレスをくれた。

「貝殻だあ。可愛い」

「それはお守り」

「ありがとお！」

私は陸へと向かい泳いだ。

私の名前は三ヶ<sup>みかのはちみつ</sup>野原海李。

ガバッ

海上に着いた。

私は浜に出た。

ヒレを乾かすと人間の足になる。

「おっしやぁ！家を見つけなきゃねえー……。あつた！」

お母様がひそかに用意してくれた結構可愛い家が私の家だ。

次の日の朝、

私は海が好きなので浜に出た。

「うーん！やっぱり海ってきもちい」

すると波の近くに男の人がいた。

「あのお・・・？何してるんですかあ？？」

その人は振り向いた。

・・・結構かつこいい

「ン？海みてんだ」

「どして？」

「俺海見てるんと落ち着くんだ」

「私も！私も海大好きです」

私達は海が好きという共通点で仲良くなった。

「やっべー！遅刻する。じゃなー！」

「あ……。さよなら」

・・・ちよっぴりガツカリ。  
また会えるといいな。

私は弥生高校に転入した。

「三ヶ野原海李みかのほうみのです！」

「じゃあ三ヶ野原みかのほうさんはあそこの席ね」

私は先生に指定された席に座った。

「よっ」

隣には今朝会った男の人がいた。

「あ。さっきの・・・」

「俺は崎本裕樹さきもとゆうき。よろしくな」

裕樹君ゆうじゅがニコツと笑った。

ドッキン

私は胸が高鳴った。

惚れ・・・ちやった？

「なあ、海李うみりって呼んでいいーか？」

「うん！」

「俺のことも裕樹ゆつきって呼んでいいから」  
「分かった」

帰り、

「海李うみり！一緒に帰ろーぜ！！」

「う・・・うん」

私は裕樹ゆつき君に声をかけられ、一緒に帰ることになった。

「海李うみりん家ってどこなんだ？」

「海の近くだよ」

「家族は？」

「一人暮らしだよ」

「お。きぐうだな！俺も一人暮らし」

「共通点多いね」

「ホントだな」

裕樹ゆつき君はアハハッと笑った。

可愛い笑顔だなあ・・・。

いつのまにか家の前に着いていた。

「あ！ココ私ン家だよ。じゃあバイバイ」

「おーココか・・・じゃな」

私達は手を振って別れた。

・・・やっぱあ。

私、裕樹君<sup>ゆうき</sup>に一目惚れしちゃったあ・・・。

私マーメイドなのにごおしよあ！！

## 友達に聞いた真実

くプルプルプル

私はある所に電話をかけた。

「・・・はい？」

「あ。海李うみりだよ」

「海李？！」

そう、私は友達の叶佳きょうかに電話したのだ。

「お久だねえ！あれ・・・。海李うみり陸にいるのにどうして海と繋がるの？」

「ん？この家お母様が用意してくれたからお母様が色々してくれてるんだよ」

「へえ！お母さんに感謝 感謝」

こんなこと話してる場合じゃないよ。  
本題を出さなきゃ！

「・・・叶佳きょうか」

「ん？」

「マーメイドだってバレたらどうなるの？」

「人間に？」

「うん」

「うーん・・・。あ！ちよっと待ってて」

そう言っていると叶佳きょうかはなにかを探しているようだった。



「あつたあ！」

「へ？」

「あのね……。『人間に自分がマーメイドだってバレたらもう二度と陸にあがることも、海上にあがることすらできなくなる』だってさ。マーメイド専門BOOKに書いてあるよ」

「えええええ？！」

「そんな……」

「じゃあ二度と裕樹ゆうきに会えなくなるじゃん……。そんなのやだあ。」

「え？どうしたの？？もしかして海季正体うみりばらす気じゃ……」

「そ、そんなわけないじゃん！！」

「だよねえ。よかった」

「じゃあありがと」

「うん。バイバイ」

ガチャッ

私は電話を切った。

はあ……。

どうしよ……。

「バレたら裕樹ゆうきと会えなくなるし、言ったら裕樹ゆうきに会えなくなるし……。」

あゝん！  
誰か助けてえ

マーメイドの姿で・・・

次の日、

私は学校に向かった。

ガラッ

教室に入り、自分の席に座った。

「おっす。海李<sup>うみり</sup>」

振り向くと、裕樹<sup>ゆうき</sup>がピースしていた。

ドッキン

私は顔を真っ赤にした。

「お・・・おはよ」

「どした？顔あけーぞ？」

そう言っ<sup>て</sup>裕樹<sup>ゆうき</sup>は自分の額と私の額をくっつけた。

私の胸がドキドキしている。

近づけるな。バカあ！

「熱はねーみたいだな」

そう言いながら自分の額と私の額を離れた。

・・・あー。ドキドキしたあ。

「なあなあ、今日さばらねー？」  
「え?!」

さ、さばるって・・・。

「そんなの悪いことじゃん!」  
「いーんだよッ。それとも海季<sup>うみり</sup>って真面目子ちゃんなのか？」  
「ち・・・ちがうよ!」  
「じゃあ行こうぜ」

グイッ

急に裕樹<sup>ゆうき</sup>は私の腕を引っ張った。

そしてそのまま教室を出て、学校も出た。

「ど・・・どこ行く?!」  
「いーから着いてこいッ!」

私達は何分間か走りつづけた。

「着いたぞ！！！！！」

「え?!」

そこは私達が出会った海だった。

「朝もきれーだな」

「海はいつも綺麗だよ」

私は海を見つめた。

・・・ホント綺麗。

みんな、元気かな。

「なあ海李<sup>うみり</sup>」

「ン？」

「俺達・・・ココで出会ったよな」

「そうだね」

つか！

裕樹<sup>ゆうじゅ</sup>何当たり前のことを真剣な顔で言ってるの?!

・・・変なの。

「俺さ、子供の頃さ、子供の人魚みたんだ」

「え?!」

「なんか綺麗なうろこしてた・・・」

私じゃないよね。

私・・・ココ来たことないし・・・。

「もう一回会いてーなって思っっていつもココにいるんだ」

「いつも・・・？」

「ああ。朝も昼も夜もいるぜ」

そんなに・・・。

その人魚は愛されてるんだな・・・。

うらやましい。

そして学校が終わり、私達もそれぞれ家に帰った。

夜、

ベランダに出ると、砂浜に裕樹ゆうきがいた。

ホントに待ってるんだなあ・・・。

よし！！

私は裕樹ゆうきに見つからないように砂浜に向かい、海に飛び込んだ。

そしてみるみるうちに私はマーメイドの姿になった。

バッシャンッ

私は水中から跳びはねた。

・・・裕樹ゆうきにバレるように。

「あー!」

裕樹ゆうきは気づいた。

「お前はあの時の・・・」

・・・え？私？!

「このうろこの色……。その髪型……。やっぱりお前だ」  
「どうしてココにいるの？」

「お前に会いたくて……。ずっと待ってたんだ!」

私はニコツと笑った。

「私も会いたかった。会えて嬉しい」

私は昔会った記憶も無いくせに話をあわせた。

「じゃあ。またね」

「あー!」

バツシャーンッ

私は水中に潜った。

「あいつ・・・、誰かに似てる・・・」

これでいい。

私も満足

でも・・・私、裕樹ゆつきに会ったことないのに・・・。  
どうして裕樹ゆつきは知ってるの？



## 告白と涙の別れ

くプルプルプル

私はまた誰かに電話をかけた。

「もしもし？」

「あ。もしもしお母様？」

「あら海<sup>うみ</sup>季。どうしたの？」

私はお母様に電話おかけたのだ。

「子供の頃私・・・陸の近くに行ったことある？」

「あるわよ。波に流されて・・・。もうお母さん達探し回ったのよ」

「そうなんだ・・・。ありがとう！じゃね」

「バイバイ」

ガチャッ

私は電話を切った。

私・・・1回会ったんだ・・・。

くピンポーン

家のチャイムが鳴った

ガチャッ

「はい？」

ドアを開けるとそこには裕樹ゆじきが立っていた。

「よお」

「何？」

「つめてーな。ちょっと歩かね？」

「いいけど・・・」

私達はまた海に向かった。

ザザーン

波の音が聞こえる。

懐かしい音・・・。

「海李うみり・・・」

「ン？」

「昨日マーメイドに会ったんだ」

「え?!」

それは私だった。

「昔にあった奴と一緒にだったんだ」

「それっていいことじゃん？」

「おお。そーなんだけど・・・」

裕樹ゆうじゅは下を向きながら話し始めた。

「なんかさ・・・俺そいつとはちがう世界にいるような気がする・・・」

・・・“ちがう世界”。

「だってさ、俺は人間でアイツは人魚。俺は陸にいてアイツは海。ちがうところに住んでいて種類も違う・・・」

「裕樹ゆうじゅは・・・」

「ン？」

「そのマーメイドのこと好きなの・・・？」

裕樹ゆうじゅは少し黙り込み、口を開いた。

「好き・・・」

ズキッ

私の心が痛んだ。

「ゴメン……。帰るね」

私は走り出した。

「海李<sup>うみり</sup>!!」

バタンッ

私は家のドアをおもいつきり閉じた。

「……。やだよ」

私は目に涙を溜める。

「どうしてなの……。?どうして……。」

私の目から涙が溢れ出した。

「どうして裕樹<sup>ゆうき</sup>の好きな人が私の人魚の姿なの?!」

私は泣きながら叫んだ。

「……。どうして人間の私じゃないの?!」

私は人魚だけど、人間の私を見てよ……。

私はその日、泣きながら眠りについた。

次の日、

私が学校に行くために家から出て学校に向かった。

「よ……よう」

裕樹ゆうきが声をかけた。

……明るく笑顔で話さなきゃ！  
裕樹ゆうきに罪悪感が……。

「おはよ。裕樹ゆうき！あれ？どうしたの？なんか暗いねえ？？一日の始まりは朝だぞー？？」

私は苦笑いをしながら明るくふるまった。

「……そうだな」

教室に入った。

筆箱を見るとシャーペンに芯が入ってなかった。

「ゆうーきー！！」

私は裕樹ゆうきの肩をトンツと叩いた。

「どしたんだよ」

「シャー芯ない？」

「あるぜ」

裕樹ゆうきはそう言いながらシャー芯を出した。

「はいよ」

私の手にシャー芯を乗せた。

「あ、ありがとう」

私は笑顔で自分の席に戻った。

ガタンッ

裕樹ゆうきが大きな音を立てて立ち上がった。

「ちょっと来い」

裕樹ゆうきは私の腕を掴み、トイレの前へと連れて行った。

「お前さ、何無理してんだよ・・・？」

「え？な・・・なんのこと？？」

「とぼけんな！！俺には分かるんだよ」

「・・・」

「なんでよ・・・」

「え？」

「なんで分かつちゃうのよ！！わざと明るくしてたのに・・・。裕ゆう

樹の前では明るくしてたのに！！分かったら意味ないじゃない」

私はまた涙を流していた。

「なんでそんなに強がんだよ・・・」

「だって・・・」

「だって裕樹ゆうきが私のマーメイド姿に恋するからでしょ?！」

「え?!」

「おま・・・人魚だったのか・・・」

ハッ

私・・・言っちゃった・・・！

『人間に自分がマーメイドだとバレたら、陸にあがることすら、海  
上にあがることさえ出来なくなる』

」

「私は・・・」

「私は裕樹ゆうきのこと人間の姿で好きなのに!!」

「え」

そう言ったとき、裕樹ゆうきは私をギュッと抱きしめた。

「俺が・・・人魚のお前が好きってことは・・・」

「人間のお前も好きだったことだ」

「ゆう・・・き」

「好きだよ」

「ありがとう」

私は涙が溢れて溢れてしかたがなかった。

「海李<sup>うみり</sup>!!」

誰かが私を呼ぶ。

「お・・・お母様?!」

そこには人間の姿のお母様がいた。

「な、なんで・・・」

「あんた! 正体ばらしたね!!」

「・・・」

「もう・・・帰るよ」



お母様が強引に私の腕を引っ張った。

「痛いよお母様!!」

バツ

その時、お母様が私の腕を掴んでいた手を無理やり放した。

「な・・・!!?」

「お母さん!海李うみりが痛がつてるじゃないですか!!」  
「・・・」

「でもこれは決まりなんだよ」

「え?!」

「人間にマーメイドだってバレたらもうココには来れないんだよ」

「・・・嘘だろ」

「嘘じゃないよ!!」

私が口をはさんだ。

「じゃあ海李うみりは分かかって言ったのか?!」

私は静かにうなずいた。

「なんでだよ！！会えなくなるのに・・・」

「言わなきゃ！言わなきゃ裕樹ゆうきは分かんなかったでしょ？」

「・・・」

「だから言ったの・・・でも悔いはない・・・もういいの。帰るわ裕樹ゆうき。元気でね」

私が歩き出した瞬間、

グイッ

裕樹ゆうきが私の腕を引っ張り、自分の唇と私の唇を重ねた。

「んッ?！」

裕樹ゆうきは私の唇を離れた。

「じゃな・・・海李うみり」

裕樹ゆうきをフツと見ると、涙を流していた。

「ゆう・・・き」

「行くよ。海李うみり」

私は無理やりお母様に引っ張られた。

「裕樹！！愛してる！！！！！！また会おうね」

私は大声で叫び、ピースした。

裕樹もピースしてくれた。

・・・バイバイ裕樹。

好きだよ・・・。裕樹。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3319d/>

---

私の正体\*。 マーメイド\*。

2010年10月11日14時26分発行